

同窓会便り

発行
東北大学・電気・通信・電子・情報同窓会
仙台市荒巻字青葉
TEL 22-1800
発行責任者
高野知彦
(題字 高野知彦氏)

松前重義博士の

勲一等旭日大授賞を祝して

永井健三



御略歴

明治34年10月24日 熊本県生れ
大正14年3月 東北帝大電気科卒 通信省入省
昭和11年1月 電気学
会浅野賞
昭和11年11月 工学博士

昭和20年8月 通信院
総裁
昭和21年4月 公職追放により辞任
昭和21年 東海大学設立
昭和26年 公職追放解除により同大学学長
理専長
昭和42年 同大学総長
昭和47年 モスクワ大学名誉博士
昭和44年 衆議院議員
昭和46年10月 マダガスキーコニック最高勲章(ソ連、ハンガリー、ブルガリア、デンマーク、ポーランド)

松前重義博士がこの11月3日に勲一等旭日大授章を受章された。東北大学の工学系でこんな高級な勲章をうけた方は初めてであり誠に御出度く、東北大学工学系全部を挙げて大いに御祝い申し上げます。

松前博士は大正14年東北大学工学部電気科を優秀な成績で卒業された。恩師技山教授の懇望を承けて通信省に入り電気通信の世界に入られた。当時の日本通信界は装荷線輪の時代で簡単な線輪を高価で輸入して使用していた。余りに高価なので松前博士はこれの国産化を考え会社社を督励して装荷線輪を作られた。更に一歩進んで装荷線輪を無くした無装荷ケーブル方式を提唱した。無装荷搬送多重方式は学会にも反対があったが梶井部長のもと周囲の反対を押し切って進められた。松前博士は独のエスペンシードとも議論を戦わし無装荷の優秀性を説き、無装荷多重搬送方式は国内は勿論満州にまで実用されたのである。

松前博士は戦前外国製品尊重の風潮の中にあつて総べて国産化の運動を押し進め技術は材料からと言うので仙台に東北金属工業株式会社を創立し材料の自給を計った。東北金属は現在も盛業をつづけ松前さんの播かれた種の成長したものである。松前さんはこの戦争の戦況が悪いのを憂い高松宮などの力を借りて和平を持ち込み度く運動をしていたが、これが東条英機首相の忌避にふれ42歳で勲三等勲章を首にぶらさげた二等兵に徴用された。そのうえ三隻の火薬船一隻に乗せられてルソン島に運ばれた。その途中二隻は米軍の魚雷に撃沈され松前さんの乗った一隻が辛じてルソン島についた。辛い二等兵生活を送りながら国を憂い東条失脚後帰還して東京の焼けた荒野にた、れた気持は如何なものであつたらうか。松前さんは通信省の工務畑を歩かれたが終戦の時には通信院総裁になっておられた。通信院総裁は通信大臣に相当するものであるので昭和46年

大臣経験者として勲一等瑞宝章を受章されたのは当然の事である。一方昭和17年には日本再建には人材よりの考えから静岡県三保に東海大学を創立された。松前さんが兵隊に徴用中はこの学校は今にも消え去りそうになつたが東北大学技山教授の力によって漸く生き延びた。本年は創立四〇年、医学部まで有する私学の雄となり歴大な学生数を有する大学となつた事は誠に芽出度い限りである。松前さんは終戦後公職追放によりしばらく公職から離れておられたが高松宮にお願して翁島の官邸の一部を借り村塾とでも言うべきものを開き今後の日本を背負うべき青年の教育に当られた。昭和26年公職追放解除により東海大学の総長に復帰すると共に政界に打って出て熊本県選出の衆議員として大いに活躍された。松前さんは目を海外にむけ特に東側諸国との国交に対して極めて大きな貢献をしている。コペンハーゲン郊外に「日本文化センター」

を作りここを足場として学問的に或は文化的にソビエトを始めブルガリヤその他多くの国と接触を保つておられる。ブルガリヤのソフィヤ大学の名誉博士を受けモスクワ大学からも名誉博士を受けておられる。逝去したブレジネフと直接会って話をした日本人は少ないと思うが松前さんは会われた一人である。これら東側諸国と接触をし国交を口火を開いただけでも勲一等旭日大授章を受けられるのは当然であろう。ともかく松前さんは普通人のように一つの仕事にだけこだわっている方ではない。八面六臂普通人の及ぶところではない。永井道雄氏の言葉を借りれば、「怪物」である。その上世界柔道連盟の会長である。筆が走りすぎたが松前東海大学総長の今後益々の御活躍と御健康を祈念し勲一等旭日大授章の受章のお祝いの言葉にかえたい。

★ ★ ★

大内三千三先生

大内三千三先生のお名前を伺ったのは終戦も間近の頃だったと思う。しかし小生が実際に目撃したのは、

昭和46年11月 勲一等瑞宝章
昭和47年2月 モスクワ大学名誉博士
(ソフィア大学、タブエスト工科大学、モンクト工科大学、ドレストン工科大学名誉博士
世界柔道連盟会長
昭和57年11月 勲一等旭日大授章

昭和二十五年の夏頃だったと記憶している。大内先生が、速研の黒洞用のシユラーゲモータの試験をなさるといふので、志願して手伝わせて頂いたのが最初であった。余り御自身のお気持をお顔におぼしにならぬ無口なお方だなど、その時思つたものだった。その大内先生が岩手大学教授として昭和十九年六月一日来盛され、爾来御退官になられた昭和三十九年三月まで、先生のお側近く

二村先生 御逝去のお知らせ

会員の皆様には既に御承知の方々も多いと思いますが、東北大学名誉教授二村忠元先生には去る昭和57年12月18日午後8時10分急性心不全のため急逝されました。全く突然の御逝去で誠に痛恨哀惜の御情に耐えない次第であります。告別式は12月24日午後1時、正雲寺において、約千名近い会葬者の下に荘厳且つ盛大に取り行なわれました。紙面の都合により二村先生の追悼記事は次回同窓会便りに掲載させて頂くことにし、取り敢えず御逝去のお知らせをいたします。

仙台高等工業学校創立 工学部創立六十周年

前回の「同窓会便り」第12号で表記の記念事業後援会の報告にありましたが、後援会長として、松前重義先生(東海大学総長)が就任され、昭和57年3月の青葉工業会ニュースに。会長就任に当って、の御挨拶がありました。その中で会員各位の本事業完成に向けて一層の奮励を呼びかけておられます。

在仙と在京会員で互に連絡をとり、松前会長のもと募金活動を進めており、昭和57年11月現在で申込総額約3億3千万円に達しております。募金期間は昭和58年3月末であり、電気関連法人からの募金目標は3億円でありま。電気系学科の諸先生方に御願いし、積極的に各会社に何つており、東北電力、日立、東芝、三菱、日電等か

暮させて頂いた。そして大内先生のお人柄を知ると共に、最初の印象とは全く違うことに間もなく気付いたものだった。ギャグがお好きで、ウィットとユーモアにあふれたそのお話しに、困難な状況があつたという間に変化して、一同思わず吹き出して、ついでに問題も解決してしまふという、温い、ほのぼのとするお方であつた。

御退官後も折々にお伺いし、甘えさせて頂き、冷えかけた魂を暖めて頂いたものだった。それが、昨年九月十五日午前十一時御老衰のためとはいえ、不帰の客として私達のところから永久にお姿をかくしてしまわれた。

大内先生に支えられ、励まされ、慰められてきた者の一人として誠に哀惜に耐えないところである。

七十五周年 記念事業後援会について

らの2千万円など着々と進展をみております。これも一重に同窓生の方々の御協力の賜と深く感謝致しております。個人寄附のお申込みがやや伸びなやんでおりますので、12月上旬再度同窓生に御手紙を御送りし、御協力を御願ひ致しましたので、各位の周辺の同窓生の方々に御協力かたお声をかけていただくよう御願ひ申し上げます。

部屋を訪れていた。先生は敬の人であつた。常に謙虚で、誠心誠意人に対しておられた。人の長所を認め、それを尊重して大切に培いつつ益々それが大きくなるよう、先生は最大の努力を払って下さつた。

先生は静の人であつた。どんな時にも、いかりを決して現わさず、すべてを受け入れ、忍び、情ある処置をして下さつた。

そして先生は寂の人であつた。黙って為すべき事を為し、賞賛を求めず、愚痴を決してこぼされなかつた。

この大内先生に、人生の旅路の一時を重ね合わせる事ができた我が身の幸せを、しみじみと有難く思っている今日この頃である。



大内三千三先生の御魂の安らかにお休み下さることをお祈りしつつ筆を擱く。(昭和57年12月27日)

電気通信研究所の近況

通研広報委員会

師走に入り、寒さも一段と厳しくなつてまいりました。後20日程で一九八二年も終ろうとしており、忘年会も至るところで開かれていくようです。会員の皆様にはお元気で活躍のこととお慶び申し上げます。

一年間の人事移動を、ご紹介いたしますと、制御工学部門の大矢銀一郎助手が助教になられ、今後の活躍が大いに期待されております。またさらに高桑雄二(固体電子工学部門)、浅野清光(超真空電子工学部門)、益一哉(電子音響学部門)、鈴木隆之(量子電子工学部門)の四氏が新助手となられました。いずれもフアイトの塊のような方々です。その研究面はもとより教育面での強化が期待できそうです。

司助教、通信用電子物理部門は武内義尚教授、今井捷三助教、電気通信材料部門は荒井賢一助教、情報理論部門は那須正和助教、光波通信部門は川上彰二助教、宮城光信助教、記録工学部門は岩崎俊一助教、中村慶久助教、真空電子装置部門は津屋昇教授、固体振動回路部門は山之内和彦教授、超真空電子工学部門は高橋正教授、蝦名淳子助教、制御工学部門は大矢銀一郎助教、電子音響学部門は御子柴宣夫教授、量子電子工学部門は稲場文男教授、伊藤弘昌助教、プラズマ電子工学部門は沢田康次教授、集積回路工学部門は西沢潤一教授、須藤建助教です。

東北大学 電気・情報系の近況 電気・情報系運営委員会

今年は何年になく暖かい年末が続いており、青葉山も寒々とした冬景色には未だひとときの間にありとこの感じます。同窓生の皆様には如何お過ごしでしょうか。

3月より10ヶ月の子定で米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校に出張中です。次に電子工学部の星宮望助教は、本年6月に北海道大学応用電気研究所の教授として栄転されました。応用電気研究所がMEの分野に新しい発展を期待し、特に星宮先生を招聘されたと伺って居ります。また大学院博士課程学生の指導のため、星宮先生に本年10月より電子工学部の併任教授をお願いしております。おなじく電子工学部では内田龍男助手が8月より助教に昇任致しました。全氏は液晶工学の分野に多くの業績を有しており、今後の活躍が期待されます。

中鉢憲賢、穴山武(基礎工学教室へ出向中)(助教)千葉二郎、後藤幸弘、菊地新喜、大沼俊朗、阿部健一、新妻弘明 通信工学科 (教授) 齊藤伸自(主任)、虫明康人、清水洋、星子幸男、高木相、伊藤貴康(助教) 齊藤恒雄、石曾根孝之、中村信良、西関隆夫、越後宏、江刺正喜 電子工学科 (教授) 樋口龍男(主任)、松尾正之、柴田幸男、脇山徳雄、佐藤徳芳(助教) 針生尚、亀山充隆、内田龍男 情報工学科 (教授) 佐藤利三郎(主任)、木村正行、重井芳治(助教) 長沢康二、丸岡章、中村維男

治教授(情報工学教室)が当っております。本年度も電気・情報系の学部及び大学院学生に対する求人数は極めて多く、学生は殆んど志望する求人先に内定致しました。しかし就職する学生数が求人数よりかなり少ないため各学科、教室の主任教授はその整理に少なからぬ苦勞を致しました。



(村上記)

務課(庶務掛)の三氏が永年勤続20年で表彰されました。現在片平キャンパスは共同講義が進行中で至る所に穴が掘られており、非常に歩きにくい状況になっておりますが、来年三月には完成することですので、昨年完成致しました通研庭園をご觀賞かたがた、お近くにおいでの際は是非通研にお立寄り下さい。(荒井記)



同窓生便り

岩手大学 志田純一

岩手富士と呼ばれる巖手山を北に仰ぎ、北上、奥羽の両山系に東西を囲まれた盛岡は、岩手の県都と云われながら人口わずか廿万程度の小さな町ですが、四季の変化に恵まれ、自然の極めて美しい学園都市です。新幹線開通によりやっとな時代の脚光をあげ始めたとは云え、特に目立った産物もなく、自然の美しさ位が売物に過ぎない当地など、中央の皆さん方にはあまり関心のない地かも知れませんが、仙台には一時間少し、東京にも最近三時間余りで出られる点で、仙台に次ぐ東北の有望大都市を夢みています。

この地に位する岩手大学は四学部からなり、工学部は旧盛岡工専が学制の変革に従って昭和廿四年、新制大として名乗りをあげたものですが、当時の電気部門は学生定員30名の電気工学科一科のみで、初代主任教授は東北大学の教官も兼ねておられた恩師の故草刈進先生(電2)でした。それから30余年の間に、電子、情報工学科が相次いで併設され、現在では三学科一〇名定員の大世帯に発展しました。そして、この三学科を合せて電気系と呼び、学科の運営すべ

豊橋技術科学大学

豊橋技術科学大学といっても御存知ない方もおられると思います。昭和53年4月に開校し、昭和57年3月に第1回の修士課程修了者を世に送り出したできたての大学です。国立大学の中で88番目に設立されたということ、縁起のよい順序と

本多 波雄

のもとに技術科学についての教育研究を行なうことを目的として設立された。そのため、従来の大学とは異なる特色を持っている。学生定員は、学部3、4年と大学院について1学年三〇〇名であり、その中二四〇名は主として高等専門学校卒業生を第3次に、残りの六〇名は高等学校(普通高校、工業高校)卒業生を第一年に入学させている。どちらの場合にも、入学者の選考

てを系として一体で行なっております。母校、東北大学に近い関係もあって、多くの面でお世話を受ける機会が多いですが、教官の同窓生がしめる割合も極めて高く、五割に及びますが、大変喜ばしいことですが、反面この辺が限界かも知れません。

同窓生を紹介いたしますと、電子工学科教授に戸英敏先生(電21)。あと一年で御停年ですが、現在全学の保健センター長として御活躍中です。情報工学科には最近三菱電機から移られた平塚篤教授(通19)が新設学科の運営にお忙がしい日々をお過ごしです。電気工学科には佐藤淳先生(電23)が教授として、相変わらず学生願負の若さとフアイトで働んでおられます。卒業順から云うと、この次に電気所属の私(電26)が、続いて電気にはいまひとりの、学生部長として御活躍中の杉田慶一郎教授(電27)がおります。さらに、若手教授として情熱に燃える横山隆三先生(電気修41)を情報に加えて計六名が系に力める同窓生の顔ぶれです。

なお、中堅教官として系をささえ頭張っておられる後輩諸君には次の皆さん方がおられますが、紙面の都合で詳細を御連絡できず残念です。

百尾恒彦(電30)、島田孟(電博42)、藤原民

日立製作所

平木 貞行

現在、日立製作所には東北大学の同窓生は約八二〇名おります。そのうち工学部の卒業生は約五八〇名、うち電気、通信、電子、情報関係は二八〇名を越え、社内各事業本部、研究所、工場で大いに活躍しております。これも一方ならぬ諸先生方の御配慮、御指導、御鞭撻の賜と厚く御礼申し上げます。一方、関係のある諸官庁、団体、お得意先の電電公社、各電力会社、競争

相手の東芝、三菱、日電などの各社、または系列各社にも多数の先輩の方々が御活躍中で、これらの方々からも御指導、御鞭撻をいただき、仙台で学んだ事を誠に有難く感謝申し上げます。さて、同窓生の近況ですが、当社の先輩の佐藤正三氏(昭12、電気)は現在、日立電子サービスの社長として御活躍される一方、我々同窓生の指導者として幅広く御活動なさっております。昭18、電気卒の池田国治氏は東日通信工業の社長として、昭19、通信卒業の平岩久夫氏は日立電子エンジニアリングの常

富士通

大槻 幹雄

務取締役として、それぞれ会社経営に、後進の御指導に御活動なさっております。また、昭24、通信卒の佐藤甲一氏は理事・通信機事業部長として、昭26、電気卒の石田幸三氏は理事・情報システム営業本部長として、昭28、電気(昭33、博士課程)卒の柴田昭太郎氏は理事・半導体事業部長として、当社の電子、情報、通信事業の要として腕をふるっておられます。昭28年組には、当社の情報システム営業本部長の髙野隆氏(旧姓、中村)、系列会社の日立電子小金井工場長の鈴木虎雄氏、日立電子サービスクロノメーター部長の佐藤利男氏などが仕事のかたわら同窓生の相談役として活躍されております。また、送電設備を製造している国分工場の副工場長小沢実氏(昭30、電気)、ロボットを製造している習志野工場の工場長、齊藤仁志氏(昭32、電気)、テレビを

に推薦入学制度を大幅に採用し、定員の半数は推薦によって受け入れられている。また来年度から、企業等に在職中の人が大学院で学べるように、特別の選考を行なうこととしている。教育組織としては、学際的な教育分野を旨とするという事で、エネルギー工学、生産システム工学、電気・電子工学、情報工学、物質工学、建設工学の6課程(学部)・6専攻(大学院)を設けている。これに対し、教官組織は専門的分野により7学系に分けられており、一つの課程・専

攻の教育には複数の学系の教官が当たっている。各学系は原則として3つの大講座よりなり、一つの大講座には教授、助教授各3名の定員が割りつけられている。なお、教官の約3割は企業等から来られた方々で、その出身学校も広く分布している。また、客員教授・助教授の定員があり、これに企業の現職の方を迎えて、産学共同研究の実をあげている。

最後に、本学で活躍中の電気・情報系同窓生の名前と所属を挙げておく。秋丸春夫教授(昭25通信、4系情報

システム講座、第4工学系長、計算機センター長)、中村哲郎教授(昭32電気、3系電子デバイス講座)、田所嘉明助教授(昭44修電子、4系情報システム講座)、齊藤海助教授(昭48博電通、4系情報処理講座)、橋口攻三郎助教授(昭50博電通、4系情報処理講座)、平田富夫助手(昭56博情報、4系情報処理講座)、財満鎮明助手(昭57博電通、3系電子デバイス講座)、山田晃助手(昭57博電通、4系情報システム講座)、本多波雄(昭19通信、副学長)、

製造している横浜工場副工場長、黒瀬忠氏(昭32通信)家電研究所、副所長、猪瀬文夫氏(昭33、通信)など多くの事業分野でリーダーとして活躍されております。

昭30年以降も諸先生方の御高配により、毎年次、5、10名の同窓生を迎えておりますが、皆中堅幹部として、また第一線のエンジニアとして獅子奮迅の活躍をしております。

おかげさまで、当社の業績も順調に発展しております。しかし、電気、通信、電子、情報分野は激しい技術革新の嵐の中にあります。新しい技術の挑戦には若い力が必要です。新しい優秀な同窓生がどしどし入って来られるよう望んでおります。(昭32、通信)



佐々木市常務取締役(昭和十六電気)で、タケダ理研の社長も兼務されておられ、ますます市本一の合理的ソフトウェア・ラボラトリーの初代所長の中原啓一氏(昭和十七年電気)は現在富士通経営研究所の所長(専務取締役)として管理者教育や社内での新しい展開に対応した様々の教育に打ち込まれております。

当社の研究・開発活動は七事業本部(システム、交換、伝送無線、電算機、オフィス、半導体、部品)と研究所(行われ、更に約五〇の関係会社および世界のロボット)の会社フアナック等約四〇の関連会社をこれら支えております。この七事業本部の中で部品は高橋節氏(昭和二十九年通信)がリーダーとして活躍中であり、伝送無線では私、大槻幹雄(昭和二十九年通信)が微力ながら責任者としてその任に当たっております。

その他、特色あるものとしては、静電ブリ

信州大学

工藤 道夫

振り返って考えると、長野と仙台の間には以前から何か一連のつながりがあったようである。

私の母校旧制上田中学からは毎年旧制二高に進学する者が跡を絶たず、また旧制松本高からもかなりの若人が東北大に進んだ。蓋し、清冽な信州の山河と「みちのく」の緑の杜の都に何か共通した自然のロマンを感じたのかもしれない。そんな訳であらうか、現在の信州大の各学部には意外に多くの東北大出身者が教鞭をとっているようである。特に当工学部では、次の名簿に示さ

れるように電気系(情報、電子、電気)に名前、その他の系(土木、

共通教室)に5名のかりの陳容である。以上の先生方はそれぞれ独自の分野で優れた研究・教育活動、あるいは地域と結び付いた分野での研究活動に日夜努力しておられます。また、東北会なる名の下に、全員で年二回のコンパを催し、特に春先には一泊旅行を兼ねて同窓間の親睦を温め、昔の東一番丁

の思い出話などで往時を偲んでおります。当工学部は講座数では信州大の中でトップクラスであり、現在は新設の建築工学科を含めて九学科一共通教室の大所帯です。最近の情報化時代に合わせ、情報処理センターも完成され、各研究室単位に端末を設置するネットワークが整備されつつあります。信州は自

所属	氏名	卒・学科	卒・年度	研究分野
情報	鹿野 哲生	電気・通信	博・34	環境情報
"	野村 彰夫	応物	"・50	"
"	斉藤 保典	電子	修・55	"
"	米沢 義道	"	博・43	画像処理
"	松本 光功	電気・通信	"	磁気記録
電子	工藤 道夫	電気	21	回路理論
"	石田 汎	電気・通信	博・48	"
"	丹野 頼元	通信	26	電子回路
"	柳沢武三郎	電気・通信	修・33	音響工学
"	松本 弘	"	博・47	"
電気	山沢 清人	電気・通信	修・44	電気機械
土木	島 坦	地球物理	23	地震工学
"	泉谷 恭男	"	修・50	"
共通	岩井 和夫	数学	19	数
"	奥山 安男	"	修・37	"
"	山崎 基弘	"	修・43	"

八戸工業大学

松坂 知行

若い技術者が渴望されます。自由に腕がふるえますので、どんどん入社される様同窓生皆鶴首してお待ちしております。



青森県の新産業都市八戸市に八戸工業大学が誕生したのは昭和四七年です。当時は日本の経済成長も順調で、むつ小川原の工業地帯の開発にかけける地元の熱意も大きく、加えて青森県には工学部のある大学がないため、工業技術者を育成する県内唯一の工業大学として本学が開学されました。その後石油ショックのため、むつ小川原の開発は石油備蓄基地へと計画変更を余儀なくされましたが、本学の方は順調に発展し、一七〇〇余名の卒業生を産業界に送り出しています。最近では同窓生の方々も求人に見えらるようになり、その度に緑に囲まれたキャンパス、テニスコート、プール等の恵まれた環境を一樣に賞めて行きます。

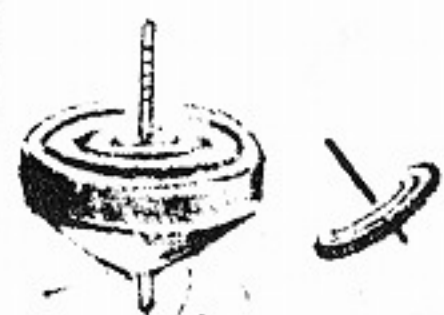
さて八戸工業大学の同窓会員の紹介をします。トップは志満嘉夫氏(電二三)で東北電力総研から本学に迎えられました。同氏は航空工学科と電気工学科の2つの学科を卒業し

ており、送配電と電力応用を教授するかたわらパワーエレクトロニクスの研究をされています。つぎは小生(電三五)で只今風力エネルギーの研究にとりくんでいます。青森県の車力村は風が強く、この地に通産省の補助金で日本最大の風車(10kW)二基が建設され、ハウス栽培の加温に利用しています。また苦米地宣裕氏(子三七)はマイコンの草創期より手作りを手がけた方で、マイコンを利用したCAIやデジタルフィルタの研究を行っています。十文字正憲氏(子博五一)はレーザの専門家、特に可変色素レーザを用いたリモートセンシングを研究の中心分野にすえています。最近では高出力レーザの応用研究にも着手しています。また大川知氏(電博五四)は情報理論、言語理論が専門で今年四月岩手大学から赴任したばかりです。目下マイコン用制御言語の開発を試み

ています。以上は電気工学科の

教員ですが、本学には昨年四月私立大学で始めてのエネルギー工学科が開設されました。その教員に内山晴夫氏(子修四一)がいます。目下十文字氏と協同でレーザを用いた同位元素の分離法の研究をしています。氏はまた硬式テニスも得意で、小生のダブルスパート十でもあります。

青森県は青森工業会の支部活動の盛んなところですが、これらの会合やその他の機会に知った県内の会員を紹介いたしますと佐川吉男氏(八戸工専・電二六)、根来健夫氏(八戸工専・電三一)、斉藤昭氏(青森県情報処理センター・電三七)、大島修一郎氏(青森放送・教電三九)、舛甚英文氏(十和田工高・教電四一)、甲地武男氏(十和田工高・教電四二)、舟木享氏(東北電力青森支店・通三七)などがおり、皆それぞれ元気に活躍しています。



然環境的にミクロな工業生産に適し、歴史的に時計、電子部品、コンピュータ関連産業などが盛んな上に、最近では技術革新の反映を受けて地域企業と信州大間の産学協同の気運が具体的に高まりつつあります。このような背景下で、東北会メンバーの先生方も地域産業に見合った研究センターの実現などにも、現在いろいろと努力なされておられます。

おわりに、当工学部の集中講義に遠路御足労を頂いている、松尾正之、竹田宏両教授に一言御礼を申し上げる次第です。